

安房直子が“紡ぎ出す”注 物語

—『銀のくじゃく』と『冬吉と熊のものがたり』を中心に

The Tales Spun by Awa Naoko
: *The Silver Peacock and The Tale of Fuyukichi and the Bear*

大沼郁子*

Ikuko Onuma Tasho

要約 安房直子のファンタジーには、裁縫・編物・機織りなど、主人公が糸や布に触れ、何かを作り出すことがテーマになっている物語が多い。本稿では特に「織り物」に注目して考察していきたい。『銀のくじゃく』は、機織りの青年が、くじゃくの化身である古老と、娘の姿をしたくじゃくの姫たちの両方から、くじゃくを織り込んだ旗を作って欲しいと懇請されることから始まる。古老の願いは王家復活のシンボルである「緑のくじゃく」、姫たちの注文は憧れの「銀のくじゃく」を織り込んだ旗を作ることだった。両者の願いに応えるため、青年は旗の表裏に別々のくじゃくを織る。代りに青年は、織った旗の中に消えてしまう。この物語の中で安房が、描きたかったことは何か。糸や布に「触れる」行為によって紡ぎ出される安房の世界について論じたい。

キーワード : 安房直子, 織り物, 『銀のくじゃく』, 『冬吉と熊のものがたり』

Abstract Awa Naoko's fantasy tales often involve themes of the main character creating something with cloth or thread by sewing, knitting, or weaving. The current paper will focus on the “woven fabrics” featured in her writing. The story of “The Silver Peacock” begins with a young weaver receiving a request to make a woven banner incorporating the image of a peacock. The request comes from an elderly man, who is actually a peacock in disguise and his daughters, who are actually peacock princesses. The elderly man requests a green peacock, the symbol of the royal family, while the princesses request a silver peacock, which is an image they find captivating. To fulfill both requests, the young weaver decides to weave the silver peacock into one side of the banner and the green peacock into the other. When he tries to do this, however, he is transported from the real world into the banner. What was Awa trying to depict in this story? This paper will discuss the worlds created by “working” with thread and cloth in Awa's works.

Key words : Naoko Awa, Woven fabric, *The Silver Peacock*, *The Tale of Fuyukichi and the Bear*

0. はじめに

安房直子(1934-1993)の描く作品には、布を織ること、縫うこと、編み出すことがテーマになっている

るものが多い。それらはいずれも、物語の主要な人物たちの手や指先を通して行われる。作品の登場人物が“触れる”ことで糸を紡ぎ、布を織りなすのだ。

これまで安房作品に「五感」がどのように生かされているかという視点から捉えようとしてきた。たとえば、視覚(色)、聴覚(歌)、味覚(食べ物)、嗅覚(花の香り)がテーマになっている作品を取りあ

* 学術研究員
Researcher

げ、どのように描かれているかを考察した。(注1)(注2)(注3)(注4) 今回、触覚という観点から見た時、意外にもたくさんの作品を見出すことができた。

安房は初期の作品から、物語の中で“触れる”ということ、独特な手法で表現している。「空色のゆりいす」では、生まれつき目の見えない女の子に空の青や、薔薇の赤を伝えたくて、椅子づくり職人の父親は、不思議な少年から空から取った絵具を貰い、椅子に塗る。その椅子に座った感触で、女の子は「青」を知る。「夕暮どきのお客」は、マントの裏地を買いにやって来た猫が、舌先で布の舐め、味見をすることで色を識別する。触覚が、他の感覚をも誘発するのだ。それならば、糸や機に触れて布を織る時、その感触からどのような物語が生まれるのか。本稿では特に「織る」という行為に着目し、織り出されるものにどのような意味が込められているのかを考えてみたい。

吉田新一は「安房直子は〈マイ・ドリームランド〉に生きた人」(注5)であると言う。安房直子の描いた多様なイメージに触れながら、吉田はこの「きちんと結晶をとげた小宇宙にこそ、安房直子の独自の世界」と指摘する。また、三木卓は、「こまかなところまで気をくばって針を使っているから、こんな刺繍になっているんだな、と思うことがある。また刺した針の穴の痕も、この人にふさわしい形になっている」(注6)と述べる。両者の指摘は、安房直子の作品世界の緻密さについて、「結晶」や「刺繍」という語句を用いて、比喩的に表現したものである。安房の「機を織る」ということをテーマにした作品は、まさにこれらの指摘を具現化していると言えるであろう。縦と横に糸を張り、意図した模様を織り込んでいく緻密な行為によって、細やかなパーツが複雑に繋がり、糸と糸がミリ単位で組み合わせることで布が織り上がる。その広がる布こそが安房が物語の中で描こうとした世界なのではないか。

安房自身は自らを「私は子どものころからあまり活発ではなくて、あまり外遊びをしなかった。学校から帰ってくると本を読んだり、ひとりで人形の洋服をこしらえたりしていました」(注7)あるいは「外で遊ぶより家のなかで遊ぶのが好きで、母から端切れをもらってお人形さんの着せかえを縫っていました」(注8)と語る。主婦としての日常生活を大切にしていた安房の作品に料理や食べものが題材となっ

たのが多いのと同様に、外で活動的に遊ぶよりも自分の楽しむ世界を布や糸で創っていた安房の作品に、布地やそれを織り上げることがテーマになる物語が多いのは、ごく自然のことであろう。

作品に描かれる布地には、登場人物のどのような願いや祈り、そして意図が込められているのか。安房直子は登場人物の手、指先から紡ぎ出される布で何を表現しようとしたのかということを考えてみたい。

1. 『銀のくじゃく』(1974)

① 『緑のくじゃく』

『銀のくじゃく』の主人公は、腕利きのはたおりの青年だ。仕事熱心のうえ、考えていることは一心に美しい織物のことだけだった。しかし、田舎で暮らしているゆえに頼まれる注文は実用的で地味な品物ばかりだった。

むかし、遠い南の島に、腕ききのはたおりがいました。/まだ若者でしたが、彼の織った布地の色どりの美しさと、手ざわりのよさにかなう者はめったにいませんでした。そのうえ、これほど仕事熱心な男もめずらしかったのです。織り物をはじめたら、もう寝ることも食べることもわすれて、はたの前にすわりつづけているのでした。(中略)また、ほんやり寝ころがっているときには、新しい模様のことを考えていました。

若者が得体の知れない老人の誘いに乗り、難解な注文を引き受けてしまったのは、こうした美しい織り物に対する強い憧れと、自分ならそれを作れるはずだという自負の気持ちからであろう。金糸や銀糸を使って織る布への渴望は、それが恐ろしい魔の誘いなのではないかという懸念も、まだ幼い弟が村で一人になってしまうことも吹き飛ばしてしまう。

はたおりの心は、新しい仕事のことでいっぱいでした。織り上がった美しい布を目にうかべると、もうどんなに遠くまででも歩いてゆきたいと思いました。こうして彼は、まるで、前を行く男の影のようになって進んでいったのです。

くじゃくの化身である老人は若者に、くじゃくの

王家の旗を織る仕事を依頼する。

「むかしの美しい王国を、わたしはここに再現したいのです。おおぜいの緑のくじゃくが、ここで平和に暮らしていました。王さまくじゃくの祝宴、木の実ひろいの会、泉のほとりの散歩……ああ、そんな、のどかな日々を送りながら、いったい、どんなくらしにあこがれて、みんなは、とんでいってしまったのでしょうか……。/わたしは、遠くへ行った、たくさんの緑のくじゃくたちを、よびもどすために、高い塔をたてて、そこに、王国の旗をかかげることを考えました。それには、どうしても、人間の力をかりるしかないと思って、わたしは、村へ、よびにいったのです。あっちの家、こっちの家とたずね歩いて、大工や石工を」

黒ずくめの服を着て、燃える目をした老人は若者に「まちがいなく緑のくじゃくを織り上げてほしい」と念を押す。老人の注文は、旗の中に、一羽の緑色のおすのくじゃくを浮き出るように織り込むという難しいものだった。ほろびかけた王国の再興を願って塔のてっぺんに旗を掲げれば、同志が集まるはずだという老人の要求に最初は怖いと思いつつも、若者がその仕事を引き受けたのは、機織りとして腕利きであるという誇りと、自分の力を試してみたいという若さゆえの欲求だった。

若者は定期的に運ばれてくる水と草の実や果物だけの食事を摂り、「日がな一日、規則正しいはたの音」を響かせた。自分がわずかな食事だけで満ち足りていることや、食事の内容にも疑問をもたず、昼夜の時間の感覚がまったくわからなくなっていることから、彼が、すでに異世界に足を踏み入れていることがわかる。しかし、若者は「これから描くくじゃくのはねの模様を思いうかべていました。彼の頭は、仕事のことでいっぱい」だったので、その異常さを気にする様子はない。これだけでも奇妙なのだが、はたおりの若者は職人としての理性を保っている。老人の注文がどんなに怪しげであっても、はたおりの心にあったのは「美しい布を織る」ということで、職業人として外れてはいないからである。

② [銀のくじゃく]

はたおりの若者の心が揺れ動きはじめたのは、四

人の姫たちに「銀色のくじゃく」の旗を織るように頼まれてからである。四人の姫たちの声は、「別の世界から聞いたような」「ことばではなくて音」のような「つりがね草が歌う」ような声だった。彼女たちの謎めいた香木のかおりやささらとした長い髪や大きな瞳に、若者は子どもの頃にきいた人間に姿を変えるくじゃくの物語を思い出す。老人が注文にやって来た時、若者は魔物の類ではないかということに恐れ、注文内容に興味を感じながらもどこか疑いを持っていた。恐れや疑念を持つということは、考える余裕があるということである。しかし、姫たちの身勝手な要求の際には困惑しながらも、疑問をさしはさむ余地はなく、若者は物語世界にでも引き込まれるように、魅了されてしまう。

姫たちは、まだ見たこともない「銀のくじゃく」に憧れていた。いや恋こがれていた。「銀のくじゃく」は、冠もつばさも、足の先、そして声までもが銀色なのだという。冒頭にも挙げたように、安房直子の作品には、味覚で色を認識したり、座ってみて色を確認するという表現がある。ここで安房は「銀のくじゃく」の声は「銀色」なのだとして描写する。会ったこともない銀のくじゃくは、くじゃくの王子なのだとして姫たちは語る。

この一見無邪気な姫たちの要求を聞くうちに、はたおりは「頭がくらくらしして」くるのだった。そして、はたおりは「自分も銀のくじゃくに会いたいと思うように」なる。本当の意味でははたおりが魅入られたのはこの時からであろう。「緑のくじゃく」の時と違って、「銀のくじゃく」への興味は糸の美しさや難解な模様に挑戦できるという職業的なものではなく、なっている。「これから織り上げる布地いっばいに、はねをひろげた銀のくじゃくをうかび上がらせてみたいと思うようになりました」(30)ただ美しいものを作りたいという欲求を超えた感情である。

ある時、若者は食事を運んできて、旗の出来具合を確認している老人に、注文の緑色のくじゃくに銀の色を織り込むことを試していいかを訊く。老人はあわてて

「銀のくじゃくが、ほんとうにいるわけがない。あれは、雲や虹と同じようなものなんだ。おてんとさまやお月さまのぐあいで、遠い空にちらっと見えて、すぐにきえてしまうまぼろしなんだ。そんなものを追いかけて、みんなとんでい

ってしまったんだ。のこったのは、四人のお姫さまだけ……そのお姫さまがたが、また銀のくじゃくにあごがれはじめた。ああ、緑のくじゃくの王国は、もうほろびかけている……」(33)

古老によって、「銀のくじゃく」の正体が語られる。緑のくじゃくの王国が減んだのは「銀のくじゃく」のせいだったのだという。それにもかかわらず、毎晩訪ねてくる姫たちの目に若者は「やりきれないほどせつない気持ち」(36)になるのだった。王国の再建を願う古老と、きやらきやら笑いながらマンガをはおぼる姫たちのどちらが真剣な願いかというのは一目瞭然である。若者の心を迷わせたのは四人の姫に対する華やかな好意の気持ちと、彼女たちの目の中にある「あごがれ」であった。そして「いっそ、自分が銀のくじゃくになってしまいたい」(37)と願う。

若者に素晴らしいアイデアをひらめかせたのは、「この森をすてて、ひろびろとした輝いた国へ、みんなで、とびたつよ」(38)という姫の言葉であった。「ひろびろとした輝いた国」のいうフレーズにはたおりは、一枚の布に緑のくじゃくと、銀のくじゃくを同時に織ることを思いつく。「裏糸に銀を使い、表の糸には緑を使って織るので。すると、できあがった一枚の布地の模様は、表から見れば緑、裏から見れば銀です」(38)いわゆるリバーシブルということになるであろう。こうした計算が、安房直子の緻密さである。

はたおりの心は、ただただ、一羽のくじゃくにそそがれていました。ひとつの体で、緑と銀と、両方のすがたをもっている、美しい鳥に……いいえ、ほんとうのところ、はたおりの心は、裏がわのくじゃくだけに注がれていました。手さぐりでつくり上げてゆく一羽の銀の鳥にだけ。/それは、目に見えない人が、心の目で、ものをつくるのににっていました。銀のくじゃくをかたちづくるひとすじの糸には、はたおりの手さぐりの愛情と夢がこめられてゆきました。

若者は、四人の姫たちのうち誰か特定の一人を愛したわけではなかった。ただ彼女たちに囲まれるといい気分になるというだけのものだった。若者は、不気味ではあるが真摯な古老の願いではなく、やや

浮ついた姫たちの要望の方に真剣に取り組むようになったのである。若者の手、そして指先から作られたものには「愛情と夢」が込められたのだという。

ある夜、機音が止んだ時、機織りの部屋には若者はいなかった。

しかし、機にかかった布の中のくじゃくは、みごとな緑のはねをひろげていた。それは古老の注文した通りの王国の旗だった。四人の姫たちが布地を手に取り裏返した時、そこには、銀のくじゃくが、美しいはねをいっぱいひろげていた。その銀のくじゃくの様子は次のように描写される。「何と高貴なすがたでしょう。その冠は、みごとな銀細工のようでした。ひろげたはねの先は、まっ白い波しぶきのようでした。そして、その目は、生きていました。くろくろと輝いて、どこか遠いところを、じっとみつめているのです。」(43)

姫たちが塔の上に旗を立てると、銀のくじゃくは本当に生かすはじめ「フー」と機織りの若者の声で鳴いた。緑のくじゃくを織って欲しいという老人の要求と、銀のくじゃくを織って欲しいという四人の姫との板挟みになった若者は、表裏にその両方を織り込むという高等なテクニックを用いて旗を完成させるのだが、若者の肉体そのものは跡形もなく消えてしまう。

《自作についてのおぼえがき》の中で、安房直子は「ほろびたものへの憧れ」が、ファンタジーを書かせるのではないかと述べている。

「あとかたもなくほろびて、もう誰の目にも見えなくなってしまったものに、そしてその廃墟にただよう不思議な色をした幻想に私は惹かれます。それから、人の目には決して見えないさまざまの魂たち—木の精や風の精や、季節の中に住む、あらゆる魂たち、また、魑魅魍魎といった、えたいの知れないものたちにも、私はとても興味もっています。」(注9)

さらに安房は、『銀のくじゃく』の作品で、憧れる事と、ほろびる事が、時には表裏一体となる事を書いてみたかったのです、と結ぶ。「銀のくじゃく」には、若者の「愛情と夢」が込められていたとあるが、それに心血を注いだ若者は、身も心も織られた布地に吸いとられてしまう。作者は「憧れとほろび」の一体化を、旗の表裏に「緑のくじゃく」と「銀のく

じゃく」として描いた。

藤澤成光は、この安房の《自作についてのおぼえがき》を踏まえながら「作者の言葉から分かるのは、彼女が、この一編を織りはじめるきっかけとなった『表』のほうの図柄が、何だったのか、ということだけだ。そして、作者自身も含めて、人がごく普通にこの作品について語れるのは、やはり、こっちだけなんだ、『表』のほうについてだけなんだ、と私たちはあらためて確認させられることになる」(注 10)と述べる。

しかし、安房はほろびへと導く「銀のくじゃく」を裏側に描いた。

「銀のくじゃく」とは何だったのか。虹や霧のように可視化はされても手に触れられないものであり、まさに「憧れ」の存在ということになるのだろう。夢に描くことができても手に触れることはできないのだ。はたおりの若者が追及したのは、究極の美しさであった。美はそれを願ひ憧れる気持ちが生み出すものだ。可視化することができ、触覚で確認できる「銀のくじゃく」が織り上がった時、若者は姿を失う。安房直子が廃墟や滅びへの魅力を感じるの、かつてそこに生きた者たちの息吹が遺物を通して感じられるからではあるまいか。若者は、くじゃくの国の再興を象徴する緑のくじゃくを織りながら、王族たちが魅了された「銀のくじゃく」の存在を知り、制作に手をつける。「銀のくじゃく」には王国に生きた王族たちの命も含まれ、かつそれを創ったはたおりの若者の命さえ封じ込められている。若者は、究極の美しさを追求するあまり、かつて生きた者たちの息吹が感じられる本物の廃墟を完成させた。つまり、滅びを実体化した時、それを可能にした者は存在を失うのである。

2. 『冬吉と熊のものがたり』(1984)

①冬吉と金の糸

『冬吉と熊のものがたり』は、1983年に『目白児童文学』に「冬吉と熊」というタイトルで発表されたのち、改題され翌1984年にポプラ社から発行された。

寒村に老母と暮らす冬吉はある冬の日、山いもを背負い緑色のマフラーをした熊に出会う。自分が探ろうとしていた山いもの先を越されて、苛立っていた冬吉だったが、一緒に特製のとろろを作るうちに、熊のことが好きになる。卵の黄身だけを入れて作る

とろろはつややかでまぶしい金色になる。熊が冬ごもりの前に食べるというとろろに満足した冬吉の目にとまったのは、くるみの実ほどの大きさの金のクモが作る黄金色の巣だった。驚く冬吉に、熊は次のように説明する。

山には、山んばがいる。その山んばの家には、金のクモがたくさんいる。もう家の中が、クモの巣でいっぱいになるほどいるんだ。山んばは、冬になると、そのクモの糸を集めて大きなショールをつくるんだ。それからその金のショールをかたにかけて外に出るんだ。そうすると、山にどっと春がくるんだ。(30)

ここでは山んばが紡ぎ、織るショールは、春の到来を告げるものであると説明される。

かつて熊が山んばにも、とろろをごちそうしてそのお礼にもらったのだという。山んばの宝物だという金のクモの巣を見つめていると、まぶしく、冬吉の耳には心地よい音楽さえ聞こえてくる。ここにも安房直子に特徴的に見られる共感覚が表現されている。視覚で認識されるものを聴覚でも感じているのだ。クモの巣は、目にも耳にも心地よく、そして花の匂いまでもたらし、身体もぼかぼかする(30)。読者としては、作者の言葉による描写でしか想像しできないはずなのに、視覚以外の感覚での説明が付与されると出来るはずのないその感覚を体感している気になる。

深い眠りにつき、いい夢を見ていた冬吉が目覚めると大きな屋敷だと思っていた熊の家は、動物の巣に変わり、村では20日もの時が過ぎていた。このあたりは、昔話によく見られる手法である。浦島太郎をはじめ、体感していた時と実際の時間が異なるという筋はよくある。帰り際冬吉は、偶然、触ってみたクモの糸の感触が心地よくて思わず、金色の糸のひとつかたまりを手にする。そっと一本引っ張るとするするとほどけたので、冬吉はその金色の糸のかたまりをもらうことにする。

安房はよく作品を執筆する時、筆を執り書き進めるためにグリム童話や遠野物語、あるいは宮沢賢治の作品を読み、座右に置くという。安房は「メルヘンの貴重なエッセンスを飲んだような気持ちになり、筆がうまく進むのです」(注 11)と述べる。貧しい冬吉が山の中で熊と出会いひとときを過ごす。知ら

ず知らずに異界に足を踏み入れ、此岸とは違う時間の流れを体験し、帰りに彼岸の物を持ち帰るといふ枠組みは、安房が愛読したグリム童話や遠野物語に見られる。

この段階でわかる金のクモの糸の情報は、山んばの宝であり、春という季節をもたらすものであり、幸をもたらすものであるということだ。異界から持ち帰ったものが、幸福をもたらすといふ安房作品には、他にも「ききょうの娘」がある。ききょうの花の化身である娘が嫁入り道具として持ってきた椀から出てくる料理によって、男は健康と幸せを手に入れるといふものだ。遠野物語では、迷い家（まよいが）を訪れた者は、その家から何か品物を持ち出してよいことになっており、それは持ち帰った者の家に富貴を授けることになるといふものである。その枠組み通り、金の糸を持ち帰った冬吉にも幸せな出来事が起こる。熊の家から戻った一年後、隣村から機織りの上手な娘さちえが嫁にやって来る。

熊の家から持ち帰った「クモの糸は、絹のようになめらかですべっこい」ものだったが、冬吉はそれをどうにかするのではなくただ引きだしの奥にしまい、所持しているだけだ。つまり、金のクモが紡ぎ出した糸に対して、冬吉は受動的でしかない。はたらき者の嫁が来たことは幸福なことにちがいないが、ここまでは従来の昔話の枠組みの枠を出ていない。

②さちえと金の糸

嫁に来たさちえに金の糸を使って何かを織るように勧めたのは冬吉の母親であった。さちえは緑色の糸を基調にして、金の糸をとところどころにあしらったマフラーを織る。冬吉の畑で作った大麦でビールを作った熊は、冬吉にビールをふるまうために彼を誘う。ビールに酔った心地良さと冬吉は、またも長期間、家に帰ることを忘れてしまう。心配したさちえは、金の糸をあしらったマフラーを巻き、冬吉を探しに行くことにする。

この時、さちえには自ら織り上げたマフラーによって「さちえの耳に山の音が、これまでとはまるでちがって聞こえて」くるのだった。ただの風や木々の音が、「いそいでいそいでたすけだせ、冬吉もうすぐ熊になる」と警告を促すものへ変っていく。さらに、ふぶきに巻き込まれ、前に進むことができなくなったさちえを導いたのは、マフラーに編み込んだ金の糸だった。糸は蠟燭のようにピンと立って火を

灯しさちえを守り、進むべき先に導く。もうただの綺麗な「糸」ではなく、さちえが金の糸を使ってマフラーを織ったといふ積極的な働きかけが、警告を発したり、保護したり、先導したりと幾つもの役割を持つものにしたと言えるだろう。

さちえが山んばの家に着くと、山んばの家の中は、いちめん、金のクモの巣で明るい光がこぼれていた。山んばはさちえに取引を持ちかける。

「まい年、冬のいまごろになると、私はここでだいじな仕事をひとつする。それは、この金の糸をつかって、大きなショールをつくる仕事だ。しかし、ことしは、どうしたのか、目がかれていけない。手の力も弱くなってきた。そこであんた、私のかわりに、その仕事をしてくれないだろうか」

これだけでもさちえにとっては重労働で、ひとつの試練であるが、課題はもっとあった。山んばはさらに念を押す。

「いいかい、さちえ。冬吉を早く助けたかったら、早くショールを織りあげることだ。たったひとりで、だれにもあわずに、一心不乱に、しあげることだ。目がかれても、手がかれても、がまんして、この仕事をやりとげることだ。そして、それをできるだけ早く、私のところへとどけてくれることだ」

山んばの雪の部屋に閉じ込められるさちえの様子は、グリム童話にある「ラプンツェル」が塔に閉じ込められることと共通するし、7人の兄たちを助けるためにイラクサで上着を編まねばならない「七羽の白鳥」にも類似する。

さちえが機を織るために隔離された山んばの家が、すでに此岸ではないことを示すのは食べ物である。さちえは金のショールを織りはじめてからだいぶだつて、空腹を感じるが戸を開けるわけにはいかない。他の食べもののことを想いながらも、かべの雪を口にす。その雪に「からだがかしいんと白くすきとおってくるような気がした。ここにいるかぎり、これがいちばんいい食べ物なのだ」(120)と確信する。冬の間じゅうさちえを生かしつづける糧となったかべの雪については「味覚」が深める安房直子の

世界』で宮沢賢治の『永訣の朝』との比較を考察したので、ここでは割愛する。

金のショールを織っている間、途中で戸をあけてしまったら、織りかけの金の布はだいなしなり、やりなおしているうちにさちえの体から養分が吸いとられてしまうのだと山んばは注意する。「鶴の恩返し」に見られるように、織り手の命が布に込められることが分かる。冬吉が、熊の家から持ち帰っただけの金の糸と、さちえが冬山に夫を探しに行っている時の金の糸、そして山んばの家で機にかけている金の糸は、それぞれ別の役割を持つ。金の糸が大きな力を発揮し、物語の展開をうながすようになったのが、さちえによってマフラーが織られたことがきっかけと言える。「織る」という働きかけによって、金の糸は、さちえや冬吉を助ける命綱にもなり、さちえの命を吸いとりとうする魔性の布にもなり得るのだ。

さちえの機織りの様子が詳しく描写される。「横糸をとおしては、おさをうち、また横糸をとおしては、おさをうつ。するといつか、金の布が、すうっとひと巾、まるで、日の光のすじのように織れてきた」(114)。この自らの作業と次第に織られていく金のショールがさちえに勇気を与える。いっしんに手をうごかしていれば、ショールは完成し、冬吉に会えるのだという確信をもつようになるのだ。さちえの命さえ吸いとると言われていた金の布は、さちえに生きる力を与える。金の糸、そしてそれによって織りなされる布は様々な面を見せていることがわかる。

③みどりの小鳥

隔絶された世界に閉じ込められ、一心に機を織りつづけていたさちえは、時間の感覚もなくなった。その時、ふいに湧いてきたのが「なにかべつ色のものを織りたい……」(121)という欲求だった。自分のマフラーに織りこまれたみどりの糸をながめ、そのやわらかい色に、わずかに心がなごんだ。そして、その糸で、みどりの小鳥を織りこむことを考えつく。

そうだ。小さなみどりの鳥を一羽、布のはしっこに織りこんでみよう。小さな鳥なら、山んばも、たぶん気がつかないなだろう……。そんなことでもしなければ、さちえは、もう、目のいたみと、単調な仕事のくりかえしとで、気が

くりどうだったのだ。(122)

さちえは、首のマフラーから、横糸を十本ほど抜き、それを使って布の右端に小さな鳥を一羽織りこんだ。うぐいすに似た鳥の目にさちえは「自分の髪の毛」を抜いて黒い瞳をつけたのだ。自らの髪を織りこむという行為で、この鳥はさちえの分身ということができただろう。さちえは自分でつくった小鳥に金のショールが出来上がるまで自分の力になって欲しい、なぐさめて欲しいと声を掛ける。かべの雪だけを口にし、織りこんだ小鳥にだけ話しかけているさちえは、小鳥に言葉をかけるだけで理性を保つことができた。一見、小鳥に頼っているようにも見えるが、この小鳥は自分の髪を織りこんだ分身である。

金のショールを織り続けるさちえのところに、戸を開けるように誘う幻や誘惑が次々やって来る。その時にさちえを「だめ、だめ！」と押しとどめるのが、動くはずのないこのみどりの小鳥だった。みどりの小鳥は、さちえを止めるために、小さくちばしを確かにうごかし、羽をふるわせている。扉を開けてしまえば、せっかく冬吉を助けるために織りあげた布はとけて消えてしまうし、さちえの命も消耗する。みどりの小鳥によって、それが阻止されたのだが、小鳥がさちえの分身である以上、みどりの小鳥はさちえにかろうじて残っている理性ということができただろう。

金のショールが完成した時、さちえは山んばの元に走り出す。「金のショールをひらひらさせてさちえが走って行くと、風がやさしく、やわらかくなった。ふってくる雪も、花びらのような、あたたかい雪にかわった。枯れ木は、さちえの足どりにあわせてうたった。」(130)金のショールがいきなり、春を呼びましたことがわかる。物語の冒頭で熊が説明したように、山んばの金のショールが本来の役目を果たしている。

約束通り、山んばは夫の冬吉を目覚めさせ、冬吉はさちえの元に帰ってくる。

この作品では、冬吉をビールで誘った熊も、さちえに金のショールを織るという難題を申し付けた山んばも悪い存在ではない。ラストシーンでは、熊と冬吉夫婦は三人で食卓を囲みお茶を飲んでおり、さちえも夏には熊の元に遊びに来たいとさえ思っている。山んばにせよ、目と手の疲労のために機織りが

出来なかったので、さちえに手伝いを請うたにすぎない。さちえが金のショールを命掛けて織り上げたのは、冬吉を助けるための条件ではあったが、自らの闘いであった。きつねの親子がやっている屋台のうどんを食べたい、外に出たいという欲求や、一人黙々と作業することへの孤独との闘いである。

金のクモの糸は、「織る」という行為を加えることで、いくつもの働きを見せ、金のショールは春を導くものであると同時に、さちえの生殺与奪をも決めるものであった。

おわりに

今回は『銀のくじゃく』と『冬吉と熊のものがたり』を中心に、作品に描かれる「織り物」について考えてみた。他にも織ることや編むことがテーマになった作品はあるが、いずれも、作り手の命が吹きこまれているという筋は共通する。生命というものが連続と続くものであり、セーフティーネットのように、網目が命を救うということを意味することから、「織り物」が命との関連として描かれるのであろう。

しかし、『銀のくじゃく』では若者の命が吹きこまれているものの、それによって「滅び」も表現されていた。はたおりの若者が織った旗自体が緑と銀のリバーシブルであり、「憧れと滅び」の両方が表現されたというべきだろう。追求した憧れを手にし、究極の美を達成した時、その先にあったのは美しく魅惑的な滅びであった。

『冬吉と熊のものがたり』では、食べもので魅了する熊も、見返りに苛酷な機織りを要求する山んばも決して悪者として描かれてはいない。物語は、東西の昔話の型を踏襲したかに見える出だしで始まりながらも、金のクモの糸へのさちえの働きかけによって、オリジナリティが発揮されている。さちえによって織られた「金のショール」は、春をもたらすものであり、冬吉の命をつなぎとめるものでもあった。すなわち季節の運行と人命を左右するものだったのである。しかし、その運用を間違えたり山んばの言いつけに背くことがあった時には、さちえの命を奪う恐ろしい布へと変貌する。厳しい自然そのものと言ってよいであろう。さちえを救うのはそこに織りこまれた小さなみどりの小鳥であり、誘惑を押

しとどめるさちえの理性であった。

いずれの作品でも「織る」という行為に、登場人物は必死になり、自らの命を吹き込む。

機を「織る」ことが「命」に関連することを描いていることは違いない。しかし完成した「布」によって表現されることは、両作品には大きな違いがある。「憧れと滅び」、そして「自然と、それに含まれる生命」なのだ。

注 『日本国語大辞典』によれば、「紡ぐ」という語の意味は「絹・繭を紡錘にかけて繊維を引き出したり、よりをかけて糸にする。つもぐ、またいろいろなものを織りなす。作る」とされている。

【使用テキスト】

- ・安房直子コレクション1～7 偕成社
- ・童話集『銀のくじゃく』（ちくま文庫）
- ・『冬吉と熊のものがたり』（ポプラ社）

注

- 1) 大沼郁子：「色彩」で描く安房直子のファンタジー — 「熊の火」を中心に —, 日本女子大学紀要, 21, 17-24 (2014)
- 2) 大沼郁子：安房直子「雪窓」の「音」の世界を読む, 日本女子大学紀要, 22, 7-14 (2015)
- 3) 大沼郁子：「味覚」が深める安房直子の世界, 日月(日本女子大学児童文学研究) 8, 32-40 (2011)
- 4) 大沼郁子：「香り」で読む安房直子のファンタジー, 日本女子大学紀要, 23, 115-122 (2016)
- 5) 吉田新一：安房直子・讃 イメージをことばで描いた画家, 目白児童文学, 30・31, 10, (1994)
- 6) 三木卓：解説, ハンカチの上の花畑, 講談社文庫, 154, (1964)
- 7) 安房直子：童話と私, 「日本女子大学国語国文学会だより」3, (1990)
- 8) 注7に同じ
- 9) 安房直子：自作についてのおぼえがき, 「児童文芸」夏期臨時増刊号, (1976)
- 10) 藤澤成光：『安房直子が織りなすファンタジー』, 10, てらいんく (2004)
- 11) 安房直子：読むことと書くこと, 「ほるぶ図書新聞」(1983)